

ヨハネによる福音書 6:22-40 ; 「天からのパン」 ——2026
年7月5日
I. ようこそ

A. おはよう！オハイヨゴザイマス！。皆さん、7月4日の週末を楽しく過ごせたことを願っている。昨日は一日中ほとんど雨が降っていたが、それぞれの場所から花火を少しは眺めることができたことを願っている。

1. 初めてお越しの方や、オンラインで視聴されている皆さん、ようこそ。

B. 子供たちを日曜学校へ送り出す前に、今週後半に転勤となる私たちの大切な家族のために、ほんの数分間祈りを捧げたい。

1. トーレス一家は、この3年間、カルバリーでの奉仕活動において欠かせない存在であり、彼らと共に過ごせたこの期間について、主に対して永遠の感謝を捧げている。

2. ジェイソン、カイリー、ジャスティン、レイシー、そしてベイビー・Tは米国へ戻り、ジェイソンはそこで軍人としてのキャリアを続けることになる。彼らが人生の次の季節と新たな章に向けて準備を進める中、私たちは彼らのために祈り、主への感謝を捧げたい。

3. (会衆と指導者が家族に手を置き、祈る。)

C. 皆が席に戻る間に、このタイミングで小学生の子供たちも解散させよう。

1. (第2礼拝：聖書英語クラスも同様)

D. 今朝は、ヨハネの福音書の学びを続ける。また、今月は最初の日曜日であるため、聖餐式を行う時間も設ける。

1. ヨハネの福音書を共に学ぶこの時間が、礼拝の締めくくりである聖餐の備えとなることを願っている。

E. ヨハネの福音書の学びといえば、さあ、聖書を開いて、ヨハネの福音書第6章の箇所を開いてみてほしい。

1. 本日は、ヨハネによる福音書第6章の学びを続ける。聖書の箇所はヨハネ6章22節から40節で、メッセージのタイトルは「天からのパン」だ。

2. このメッセージは、おそらく2回に分けて行うことになるだろう。今週、メッセージの前半では、「『天からのパン』をめぐる対話」について見ていく。主の御心があれば、来週は41節から59節を取り上げ、「『天からのパン』の受け取り」について考える予定だ。

F. 皆さんも、すでにヨハネによる福音書第6章を開いてくれていることを願う。もしそうなら、主とその御言葉を敬うために、皆さん全員、立ち上がってほしい。

1. 私の聖書から本文を読み上げる。NJKV版聖書から読む。別の訳本を読んでいる人は、私が読むのに合わせて、自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。

2. ヨハネは次のように物語を続けている…… (R & P)

g. 復習と導入ここ数週間、私たちはヨハネによる福音書第6章の詳細を学んできた。第6章は実はヨハネの福音書の中で最も長い章なので、おそらくあと数週間はこの章を取り上げることになるだろう。

1. 2週間前、1～13節では、5,000人の給食の出来事について取り上げた。群衆の中に女性や子供は含まれていなかったことを考えると、実際には10,000人以上だった可能性が高い。

a. イエスと弟子たちは、特に多忙だった宣教の時期から離れて休息し、体力を回復しようとしていたが、群衆は彼らを追いかけてきた。

b. イエスは群衆を見て、彼らに深い憐れみを覚え、大麦のパン5つと小さな魚2匹で全員に食べ物を与えることにした。

c. イエスはパンと魚を奇跡的に増やし、そこにいた全員が心ゆくまで食べられるようにした。皆が満足するまで食べ、弟子たち一人ひとりが残りをかごいっぱい集めるほど余った。

2. そして先週、私たちは群衆への給食の後、弟子たちがガリラヤ湖を渡ろうとした際に大嵐に遭遇した出来事を詳述した箇所を学んだ。

a. 弟子たちは、ガリラヤ湖を渡ろうと、何時間も海の上で立ち往生していた。いくら漕ぎ続けても、全く前進できなかったのだ。

b. 実はイエスは、弟子たちをこの嵐の中に一人で送り出したのだ。イエスは、パンと魚を食べた群衆を解散させている間、弟子たちに舟に乗り込み、自分抜きで向こう岸へ渡るように命じた。

c. 今回の学びでは、イエスがこうした行動をとった

のには、おそらく二つの理由があったと指摘した。

i. 第一に、イエスは弟子たちを誘惑から守ろうとしていたのだ。群衆はイエスを力づくで捕らえ、自分たちの王にしようとしていた。弟子たちもそれに乗り気だったに違いない。そこでイエスは、事態が手に負えなくなる前に、弟子たちを先に行かせたのだ。

ii. そして第二に、イエスは彼らを誘惑から守るだけでなく、彼らの信仰を試すための試練へと導いていたのだ。イエスは、弟子たちが嵐にどう対応するかを見極め、その嵐を利用して、イエスと共に歩む道のりの後半で必然的に訪れるであろう嵐に備えさせたかったのだ。

d. 弟子たちが嵐の中を懸命に漕ぎ進む間、イエスは彼らを見守り、彼らのために祈っておられたことがわかる。

i. イエスは彼らを見捨てなかった。彼らを見守り、彼らのために祈り、そして夜の第四番目の番の頃、水の上を歩いて彼らのもとへやって来たのだ。

e. イエスは弟子たちを嵐の中に送り出した方であつたが、同時に彼らを嵐から救い出した方でもあつた。

- f. イエスは彼らのもとへやって来て、慰めと励ましの言葉をかけ、「勇気を出しなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。
 - g. 弟子たちは喜んでイエスを舟に迎え入れた。そうすると、風と波は静まり、彼らは奇跡的にガリラヤ湖の西岸にある目的地に到着した。
 - h. 今朝の聖書箇所は、その翌日の出来事を描いている。22～25節にあるこの箇所の冒頭をもう一度見てみよう。
- II. ヨハネによる福音書 6章22～25節；群衆
- A. さて、大群衆への給食の翌日、人々はイエスがどうなったのか気にかけていた。
- 1. イエスに食事を与えられた後、どれほどの人々がその場に留まっていたのか、聖書には記されていない。しかし、イエスを探してその周辺に留まっていた者もいた。
 - 2. 彼らは、そこにあった唯一の舟が前夜、イエスの弟子たちを乗せて出航したことに気づいたが、イエスご自身が彼らと一緒に舟に乗らなかったことに気づいたのだ。
 - 3. どうやら嵐の間、ガリラヤ湖の西側にあるティベリアスから出航した船のいくつかは、前日に群衆に食が与えられた場所の近く、湖の東岸に避難しようとしたようだ。
 - 4. そこで、人々はイエスがもはやその周辺にいないと確信すると、そのうちの何人かはティベリアスから来た船に乗り込み、ガリラヤ湖を渡って対岸のカペナウムへと戻った。そこは、イエスが宣教活動の一種の拠点として定めていた場所だった。

- 5. 彼らはイエスを探し、やがて見つけ出した。そして、イエスを見つけると、「ラビ、いつここに来られたのですか」と尋ねた。
- 6. 彼らがイエスに尋ねたのが「いつここに来られたのですか？」であり、「どうやってここに来られたのですか？」ではなかったというのは、私にとって興味深いことだ。
 - a. 彼らの観察はすべて、舟に気づき、イエスがどの舟にも乗っておらず、しかもどこにも見当たらないということに集中していた。私は、彼らが「いつここに来られたのですか」ではなく、「どうやってここに来られたのですか」と尋ねるだろうと思っていた。
 - b. そして、このことから、彼らの考え方を少しうかがうことができるかもしれない。
 - c. 考えてみてほしい。どこかで誰かを見かけて「いつここに来たのか」と尋ねる時、たいていは相手がそこにどれくらいいるのかを知りたがっている。何か見逃したことはないか確認するためだ。「どれくらいここにいるんだ？ 何か見逃したか？」と、相手の存在に気づかなかった時間を埋め合わせたいのだ。
 - d. そして、彼らにとって重要なのは、どうやらこの点だったようだ。彼らにとって重要なのは、イエスがどうやってそこにたどり着いたかではなく、いつそこに着いたのか、そして自分たちが何かを見逃したかもしれないということだった。

7. さて、24節の終わりには、人々がイエスを探していたと記されている。「探し求める」という言葉は、イエスを見つけたいと願う群衆の努力を暗示している。それは、何かや誰かを見つけようと努めること、あるいは熱心に探し求めることを意味する。
8. これらの人々は熱心にイエスを求めていたが、これから見ていくように、その理由は正しいものではなかった。
- B. 今日、イエスを求めている人は多いが、彼らは間違った理由と間違った心でイエスを求めているのだ。
1. 人々は、イエスから何かを得られることを期待してイエスを求めている。人生のあらゆる悩みや心配事がイエスによって取り除かれると期待したり、そう考えたりしてイエスを求めているのだ。また、イエスが自分たちを健康にし、富を与え、知恵を授けてくれると信じ、そう考えてイエスを求めている。しかし、イエスはそうしたことを何も約束してはいない。
 2. ある人々は、あたかもイエスが火災保険のようなもの、あるいは地獄から逃れるための「フリーパス」であるかのようにイエスを求める。彼らはイエスを主であり救い主であると公言しながらも、イエスを信じると口にするだけで地獄に行かずに済むと期待し、イエスやその御言葉とは全く相反する生き方をしているのだ。
 3. 聖書は申命記4章で、イスラエルの民について、彼らが心を尽くし、魂を尽くして主なる神を求めれば、主を見いだすだろうと宣言している。[申

命記4:29]

4. これはエレミヤ書にも反映されており、主は「あなたがたが心を尽くしてわたしを求めるとき、わたしを見いだす」と宣言している。（エレミヤ29:13）
 5. また、使徒行伝には、主は私たち一人ひとりから遠く離れてはいないと記されている。[使徒17:27]
 6. 神は私たちの近くにおられる。神は隠れてはいない。気難しそうに振る舞ったり、見つかりにくくしたりしているわけでもない。神はそこにいて、私たちが正しい心、すなわち誠実で悔い改めた心をもって神を求めるのを待っておられる。そして、もし私たちが正しい心で、全き心をもって神を求めるなら、神は見出されるだろう。神は両手を広げてそこにいて、私たちを受け入れる準備ができているのだ。
 7. ヤコブは、神に近づくよう私たちに勧めており、[私たちが神に近づけば]神も私たちに近づいてくださると約束している。（ヤコブの手紙 4:8a）
- c. これらの人々はイエスを求めていたが、正しい理由や正しい心で求めていたわけではなかった。
1. 神は私たちが神を求め続けることを望んでおられるが、私たちは正しい理由と、正しい動機と心を持って神を求めていることを確かめなければならない。
- d. ここから、次の聖書箇所へと進み、イエスを求めた人々に対してイエスがどのような答えを語られたかを見ていこう。26節と27節と一緒に読もう。

III. ヨハネによる福音書 6章26-27節；イエス

- A. イエスは、カペナウムにいつ到着したかという人々の質問に答えることなどせず、代わりに彼らに対して鋭い叱責を浴びせた。彼らがイエスを求めた唯一の理由は、パンを食べて満腹になったからに過ぎないと述べたのだ。
1. 五千人の給食は、しるしとなるはずだった。しるしとは、自分たち自身を超えた何かへと導くものである。しるしは、より偉大で、より意義深く、より重要な誰かや何かを指し示すものだ。
 2. 五千人の給食は、イエスとその神性を指し示し、神の子としてのイエスの正体を指し示すしるしとなるはずだった。
 - a. 先週、イエスが海の上で弟子たちのところに来られた際、私たちはこの点を指摘した。イエスは彼らに「わたしだ」と、「エゴ・エミ」、「I AM」と語った。イエスは弟子たちに、ご自身を「偉大なる『I AM』」として示していたのだ。
 - b. 弟子たちもまた、五千人の給食というしるしを理解していなかった。彼らの心は硬く閉ざされており、イエスが何を指し示そうとしていたのかを見抜けなかったのだ。そこでイエスは舟の上で弟子たちのところへやって来て、大胆に「ワエ・エミ」と宣言した。それは、神がモーセに与え、イスラエルの民に御自身を明らかにするために用いたまさにその名を、御自身に帰したのだ。
 3. 人々はしるしを見逃していた。彼らは、そのしるしや、イエスが彼らに示そうとしていたことを理

解したからイエスのところに來たのではない。腹がいっぱいになったから、イエスのところに來たのだ。

4. 彼らがイエスを求めたのは、イエスが無料で食事を与えてくれたからであり、もっと欲しかったからだ。
- B. 27節で、イエスは、朽ちる食物を求め、この世の一時的で物質的なものにばかり目を向けている人々を叱責する。
1. イエスはこう述べている。「朽ちる食物のために働くのではなく、永遠の命に至る食物のために働け。それは人の子があなたがたに与えるものである。父なる神が彼に御印を押されたからである」——いわば、神ご自身による承認の印である。
 2. イエスは彼らに、一時的なものにこだわるのをやめ、永遠のものに目を向けるよう告げている。この世の物質的な事柄を考えるのをやめ、霊的な事柄について考え始めるのだ。
 3. 彼らは、霊的な事柄よりも、腹を満たすことの方を気にかけていたのだ。
 4. そして、今日でもこのようなことがどれほど頻繁に起きていることか。現代の人々は、永遠の霊的な事柄よりも、この世の一時的な物質的な事柄に、はるかに気を取られていることが多い。
 - a. 人々は自分の資産や株式、預金口座に過度の関心に向ける一方で、神の御国への永遠の投資を完全に無視してしまう。
 - b. 人々は、霊的な健康よりも肉体的な健康に重点を置く。体を鍛え、定期的に運動することは欠

かさないが、祈りや聖書を読むといった霊的な鍛錬には手を付けようもしない。

- c. 人々は生涯の貯蓄を積み上げ、定年後の生活に向けてあらゆる計画や目標を立てるが、死後の人生に向けた計画を立てることには全く関心を向けない。
- 5. 私たちは、霊的なことや永遠のものを無視して、物質的かつ一時的なものに過度に注目してしまうことのないよう、自分の心を守らなければならない。

6. この地上の命は短い。それはただの一瞬の霧に過ぎない。私たちの命は、ある日はここにあり、次の日には消え去ってしまう。私たちは、本当に重要なこと、すなわち霊的なこと、永遠のことへと焦点を合わせていることを確かめなければならない。

- c. イエスは人々に、朽ちてしまう肉体の糧のために働くのではなく、永遠の命に至る糧のために働くよう勧めた。そして[イエスはこう言った]、「人の子があなたがたに与える」と。
 - 1. もちろん、イエスは「人の子」としてご自身を指している。すなわち、永遠の命を与える力を持つお方だ。神の印を授かり、父なる神からの承認の刻印を持つお方である。
- d. 読み進めて、**28節**で人々がイエスにどう応答したか見てみよう。

IV. ヨハネによる福音書**6章28節**；民

- a. イエスは、「朽ちる食物のために労してはならない」と言われたが、ユダヤ人たちは「労する」という言葉に注目した。
 - 1. 「労する」という言葉は、働きを意味し、成果を意味し、行動を意味する。人々は、神の働きを行うために何をしなければならないのかを知りたがっているのだ。
- b. ユダヤ人たちは、行いに基づく宗教に囚われていた。神に認められ、神の計画や御旨の一部となるためには、ある種の行いを成し遂げなければならないという信念に囚われていたのだ。
- c. イエスは、永遠の命に至る糧について語った

が、ユダヤ人たちは誤って、その霊的な糧、すなわち永遠の命に至る糧を得るために、自分たちで何かを成し遂げればよいと考えていた。

1. 彼らは、永遠の命に至るその特別な糧を受け取るために、何をすべきか知りたがっていた。
2. しかし、これは何かをして得るものではない。これは、私たちの善行に対する報酬として支払われるようなものでもない。
3. 多くの教派や偽りの宗教団体は、行いに基づく宗教を推進している。彼らは、霊的な祝福を受けるためには行いが必要だと教えている。彼らは、神に受け入れられたり祝福されたりするためには、特定の善行を行わなければならないと考えている。
 - a. 彼らは、十分に施しをすれば、あるいは十分に教会に通えば、あるいは一定数の人に証しをすれば、あるいは十分に聖書を読み、十分に祈れば、いつか神が善行に対して報いてくださり、これらの霊的な祝福を与えてくださる、あるいはさらに悪いことに、天国に迎え入れられるためにはこうしたことが必須だと考えているのだ。
 - b. 天国に入るのは、単に一定量の善行や善き行いを行うこと次第だ、あるいは、最終的に善が悪を上回っていれば天国に行けるのだ、と。
 - c. それは単に真実ではない。聖書が教えていることは、全くそうではないのだ。私たちが天国に入れるのは、自分たちが何

かをしたからではなく、イエスがすでに私たちのために成し遂げてくださったすべてに基づいているのだ。

- d. 天国に入り、永遠の命に至る霊的な糧を受けることは、純粋にイエス・キリストとその

カルバリの十字架上で成し遂げられた御業と、その後の死からの復活だ。それは、あなたや私が何をするかとは何の関係もない。

- e. イエスが十字架の上で亡くなられた時、「すべては成し遂げられた」と宣言された。その業はすでに成し遂げられている。イエスがすべてを成し遂げてくださったのだ。イエスはあなたや私のために代価を支払ってくださった。だからこそ、私たちがそれを支払う必要はなくなったのだ。
- f. そのことを神に感謝しよう。もしそれが私たちに任されていたなら、誰も自分が負うべき代価を払い、天国に入ることはできなかったからだ。私たちには、それだけの価値がない。どんなに多くの善行や善き行いを積んでも、その代価を支払うことはできず、天国への入場や永遠の命を得ることは決してできないのだ。
- d. そして、イエスは人々への答えの中で、まさにそのことを指摘している。**29節**を見てみよう。
- v. ヨハネ**6:29** ; イエス
 - A. イエスは、神の業とは、御自身が遣わした方を信じること、すなわちイエスを信じることでであると

告げ、彼らの考え方を正した。

1. 私たちが天国に入る唯一の道、永遠の命に至る霊的な糧をいただく唯一の道は、イエスを信じることだ。

B. その業はすでに成し遂げられている。

1. それは、父なる神が御自身のひとり子である御子をこの地上に遣わし、御子が罪のない完全な生涯を送り、その後、私たちへの愛の証しとしてカルバリの十字架上でその命を捧げたときに成し遂げられたのだ。
2. 救われるために残された唯一のことは、御子を信じること、すなわち父が遣わされた方を信じることだ
 - a. ヨハネによる福音書3章16節はこう証している。「神は、その独り子をお与えになったほどに、この世を愛された。それは、彼を信じる者が、だれであれ滅びることなく、永遠の命を得るためである。神は、御子をこの世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。しかし、信じない者はすでに裁かれている。それは、神の独り子のお名を信じなかったからである。」（ヨハネ3:16-18）
 - b. すべての御子を信じることに尽きる。十字架での成し遂げられた御業と、その後の復活を信じることだ。あなたや私、そして信仰によって御元にやって来るすべての人々のために、御子が身代わりとなって死なれたことを信じることだ。

- c. これは、使徒パウロがフィリピの獄吏に語ったことと同じである。獄吏がパウロとシラスに「先生方、救われるためには、どうすればよいのか」と尋ねたとき、彼らは彼にこう答えた。「主イエス・キリストを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われる。」（使徒16:30-31）
- d. エペソ人への手紙は、私たちが「恵みにより、信仰によって救われるのであり、それは自分たちから出たものではなく、神の賜物であり、行いによるものではない。だれも誇るようなものではない」と、非常に明確に述べている。（エペソ2:8-9）
- e. ローマ人への手紙3章24節には、私たちがキリスト・イエスにある贖いによって、神の恵みにより無償で義と認められると記されている。（ローマ3:24）

- c. 業はすでに成し遂げられている。残された唯一のことは、父が遣わされた方を信じることであった。イエスを信じることだ。さて、人々がイエスの招きにどう応えるか見てみよう。**30節と31節**を読んでみよう。

VI. ヨハネ**6:30-31** ; 人々

- A. 人々はイエスの意図を理解していた。イエスが自分たちにイエスを信じることを望んでいることを知っていたが、そうする代わりに、イエスを信じる代わりに、彼らはしるしを求めた。
1. 彼らはイエスに、それを証明するためにしるしを行ってほしいと望んだ。すなわち、御業を見てからイエスを信じたいと願ったのだ。彼らは、神が天からのパンを与えてくださったという詩篇**78篇24節**の聖句を引用し、霊的なふりをさえしようとした。**[詩篇78:24]**
 2. しかし、見ることは信仰につながらない。しるしや不思議を見ることは、さらなるしるしや不思議を見たいという欲求を生み出すだけだ。
 3. 多くの人が主張するかもしれないが、**見ることは信じることに等しくない**。
 4. 証拠が欲しいなら、ここ数週間、ヨハネによる福音書第**6章**で読んだ内容を見ればよい。ちょうど前日、イエスは彼らのためにしるしを行われた。五つのパンと二匹の魚で、**1万人**もの人々に奇跡的に食べ物を与えられたのだ。
 5. 今日、イエスが語りかけている人々は、昨日イエスが養った人々と同じだ。今日、しるしを求めている人々こそ、昨日そのしるしを目の当た

りにし、体験した人々そのものなのだ。

6. 彼らに別のしるしを見せても、何も変わらなかっただろう。
- B. 彼らがしるしを求めたことは、実のところ、彼らが依然として物質的なものを追い求めていることの表れだった。彼らは依然として物質的なことにばかり目を向け、霊的なことには関心を示していなかったのだ。
 1. 彼らがイエスに何を提案したか見てみよう。彼らは、荒野で先祖たちがマナを受けた事実を持ち出した。マナとは、イスラエルの民が荒野で**40年間**過ごした間、日曜日から金曜日まで毎日天から降ってきたパンのような物質のことだ。
 - a. それは安息日である土曜日には降らなかったが、神は金曜日に二倍の分量を彼らに与えた。そうすることで、土曜日に集める必要がなく、それでも十分な食糧を確保できるようにしたのである。
 2. 彼らがイエスに何を言い、何を求めているか分かるか。要するに、「確かに、昨日は**1万人**の私たちが**1日分**養ってくれたかもしれない。だが、モーセはイスラエルの民が荒野をさまよっていた**40年以上**にわたり、**100万人以上**を養い続けたのだ」と言っているのだ。
 3. 彼らが何を望んでいるか分かるか？ 彼らは一生涯、タダで食事が欲しいのだ。単に施しを求めているに過ぎない。彼らは、神がマナを降らせてくださった時、先祖たちが経験したことに匹敵するか、それを上回ることをイエスに求めているのだ。

4. 彼らは靈的な事柄には関心がない。永遠の命や永遠の世界などどうでもいいのだ。ただお腹を満たし、二度と食べ物の心配をしなくて済むことだけに関心があるのだ。
5. 要するに、彼らはイエスにこう言っているのだ。
「一生食べさせてくれるなら、あなたを信じる。これから**40年**ほど食べさせてくれれば、取引成立だ」と。
- c. **32節**と**33節**で、イエスが彼らにどう応答したか見てみよう。

VII. ヨハネ**6:32-33** ; イエス

- A. イエスは再び彼らの考えを正した。彼らは、天からのパンを与えたのはモーセだと信じていたが、実際にはそのパンを与えたのは父であったのだ。
 1. イエスはさらに、父が彼らに天からの真のパンを与えると述べている。なぜなら、天からの真のパンとは、天から降りてきて世に命を与える方その人だからだ。
- B. ここでイエスが言っていることを理解しよう。天からのパンには二つある。
 1. 神は、イスラエルの民にマナを与えたとき、最初の天からのパンを与えた。神がイスラエルの民の上に、地面の霜のように細かい小さな丸いものを降らせたとき、イスラエルの民はそれを見て互いに言った。「これは何だろうか？」〔ヘブライ語で「マン・フー」〕。
 2. モーセは彼らにこう告げた。「これは、主があなたがたに食べさせるために与えてくださったパンだ。」（出エジプト記**16:15**）

3. しかし、その天からのパンは真の天からのパンではなかった。それは単なる型、つまり、神が天から送り下し、イスラエルの民だけでなく全世界に命を与える真の天からのパンを予表するものであったのだ。
4. つまり、最初のマナは、イスラエルの民のこの世の命を支えるために与えられたのだ。しかし、神は天から真のパンを送っておられた。それは単にこの世の命を支えるだけでなく、永遠の命を与えるものであり、イスラエルの民だけでなく、全世界に与えられるものだったのだ。
5. イエスは、最初のマナよりもはるかに偉大なもの、すなわち天からのまことのパンについて語っていたのだ。
6. 人々は、先祖たちが味わったもの、すなわちこの世の命を支えるマナと同じものを求めていた。しかし、イエスはそれよりもはるかに優れたもの、すなわち永遠の命を与えるものを彼らに差し出していたのだ。
7. イエスはご自身を差し出していたのだ。しかし、人々は盲目すぎてそれに気づくことができなかった。物質的なことにばかり気を取られすぎて、靈的なことを理解できなかったのだ。
- c. **34節**で、彼らがイエスにどう反応したかを見てみよう。

VIII. ヨハネ**6:34** ; 民

- A. 「このパンをいつも私たちに与えてください！」これは、イエスが井戸端の女に「生ける水」について語った時の様子と非常によく似ている。

1. イエスは彼女にこう言われた。「この水〔井戸の水〕を飲む者は、また渴くことになる。しかし、わたしが与える水を飲む者は、決して渴くことがない。わたしが与える水は、その人のうちで、永遠の命へと湧き出る泉となるのだ。」すると、その女はイエスに言った。「先生、その水をください。そうすれば、私は渴くこともなく、ここへ水を汲みに来る必要もなくなります。」（ヨハネ 4:13-15）井戸のそばの女と同じように、ここにいる人々もなお、霊的なものを肉体的なものと混同している。彼らはこのパンを常に求めている。毎日食べ物を与えてもらいたいと願っており、二度と食べ物のことを心配したくはないのだ。
2. 彼らはパンと魚を味わい、昨日は腹いっぱいになり、圧倒的な満足感を味わった。そして、それを毎日のことにしてほしいと願っているのだ。イエスが一生涯、パンと魚を与えてくれることを望んでいるのだ。
3. 彼らは依然として理解していない。そこで、イエスは前に出て、大胆に真実を告げる。イエスが彼らにすべてを明らかにする、この箇所に残りの部分を見てみよう。

IX. ヨハネによる福音書 6:35-40 ; イエス

- A. イエスは彼らに「わたしこそが命のパンだ」とはっきりと告げる。わたしこそが天からのパンだ。それはわたしだ。わたしこそが、父が天から遣わした者だ。わたしこそが、天からの真のパンだ。わたしこそが、あなたがたに語っているその方だ。
1. これは実は、ヨハネが福音書全体を通して記録している、七つの大胆な「わたしこそは」

という宣言の最初のものである。

- a. ここにあるのは、「わたしは命のパンである」という言葉だ。
 - b. ヨハネによる福音書第8章では、「わたしは世の光である」となる
 - c. 第10章では「わたしは門だ」と「わたしは良い羊飼いだ」となる
 - d. 第11章では「わたしは復活であり、命である」
 - e. そしてヨハネによる福音書第14章で、イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である」と宣言する
 - f. そして最後に、ヨハネによる福音書第15章で、イエスは「わたしはまことのぶどうの木だ」と証しする
2. これらの言葉の一つひとつは、モーセが神の名を尋ねた際に、神ご自身がモーセに与えた名と結びついている。神はモーセに「わたしは『わたしはある』である」と告げ、イスラエルの民に「『わたしはある』がわたしをあなたがたのもとに遣わした」と伝えるよう命じた（出エジプト記3:14）
 3. 神の御名は名詞ではなく、行為そのものである。神は「ある」のだ。神は、私たちが神に求めるすべてのものそのものである。神は十分であり、私たちのあらゆる必要を満たしてくださる。
 4. イエスはこの言葉を用いることで、ご自身を「天からのパン」であると示すだけでなく、御父なる神とご自身を同一視している。すなわち、御父と御子は一つであり、神が「ワレワレハ」であるの

と同様に、イエスもまた「ワレワレハ」であるということだ。

- B. イエスはこう述べている。「わたしは命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」
1. こうして、私たちは「来る」と「信じる」ととのつながりを見出す。イエスのもとに来るということは、イエスを信じるということだ。来て信じる者は満たされ、二度と飢えも渴きも味わうことはない。なぜなら、イエスが彼らのあらゆる霊的な必要を満たしてくださるからだ。
- c. しかし、この人々は信じていなかった。イエスはこう言っている。「しかし、わたしはあなたがたに言った。あなたがたはわたしを見たのに、なお信じないのだ。」
1. この人たちはしるしを見たがっていた。彼らは、見れば信じるものだと思っていたのだ。しかしイエスは、「あなたがたはわたしを見ている。そして、わたしこそがそのしるしが指し示していた者である。それなのに、なおも信じない」と語っている。

D. 37節で、イエスは、イエスへの信仰、すなわちイエスのもとに来ることは、父に由来するものであることを極めて明確に述べている。「父がわたしに与えてくださる者は、みな、わたしのところに来る」。

1. これは、神の主権、神の選び、神の選民について語っている。父なる神が働きをなしておられ、イエスのもとに来るすべての人を、イエスに与えておられるのだ。神こそが働きの始まりである。父なる神こそが、私たちを選ばれた方なのだ。

2. エペソ人への手紙1章には、父なる神が「世界の基が据えられる前から、キリストにあって私たちを選び、御自身の御心の喜ばれるままに、イエス・キリストによって御子としての養子縁組に定め、愛のうちに御前で聖く、非難の余地のない者となるようにされた。それは、御恵みの栄光を称えるためであり、その御恵みによって、私たちは愛する御子に受け入れられたのである」と記されている。（エペソ1:4-6）

a. 神はあなたが生まれる前からあなたを選ばれた。そして、その選びはあなたの行いとは全く無関係だ。あなたは何も勝ち取ったわけではなく、神の選びに値するようなことをしたわけでもない。あなたが成し遂げた善行は、神の選びに何の影響も及ぼさなかった。神は世界の基が据えられる前、つまり世界を造る前から、あなたを選び、イエスのもとに来るようあらかじめ決めておられたのだ。

3. イエスはこの手紙の後半で弟子たちにこう述べている。「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任

命したのは、あなたがたが行って実を結ぶためである」（ヨハネ15:16a）

a. 同じことが私たちにも当てはまる。私たちがイエスを選んだのではなく、イエスが私たちを選んだのだ。

4. ローマ人への手紙8章は、次のように教えている。「神はあらかじめ知っておられた人々を、御子の姿に似せられるようにとあらかじめ定めておられた。それは、御子が多く兄弟たちの長子となるためである。さらに、神があらかじめ定めておられた人々を、神はまた召し、召された人々を義と認め、義と認められた人々を栄光に輝かせた。」（ローマ8:29-30）

a. 私たちは神によってあらかじめ定められ、招かれ、義とされ、栄光に輝かされたのだ。そしてローマ人への手紙8章によれば、このあらかじめ定められたことは、神の予知に基づいていた。神は、誰が御自分のものとなるかをあらかじめ知っておられた。聖書は、神が主権者であることを明確に教えている。

E. しかし、37節の残りの部分では、イエスが「わたしのもとに来る者を、決して追い出さない」と語ることで、人間の責任についても教えている。

1. すべては父から与えられているが、イエスのもとに来る者は決して追い出されることはない。私たちには、イエスのもとに行き、イエスに応え、イエスを信じるという責任がある。追い出されるかどうかは、個々人が信じるかどうかにかかっている。

- a. だからこそ、イエスは大胆にこう言われるのだ。「わたしに従いたいと思う者は、自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしに従え。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしと福音のために自分の命を失う者は、それを救うのである。」（マルコ8:34）
- b. ローマ人への手紙10章13節には、「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」とある。（ローマ10:13）

- c. それゆえ、ヨシュアはイスラエルの民の前でこう宣言した。「今日、あなたがたは、誰に仕えるかを選びなさい。川向こうでああなたがたの先祖が仕えていた神々か、それともあなたがたが住んでいるこの地のアモリ人の神々か。しかし、わたしとわたしの家は、主に仕える。」（ヨシュア記 24:15）

- d. 申命記30章で、モーセは人間の責任について次のように証言している。「今日、わたしは天と地を証人として、あなたがたの前に命と死、祝福と呪いを提示した。それゆえ、命を選びなさい。そうすれば、あなたとあなたの子孫とが生きることができる。」（申命記30:19）

- 2. 私たちは選択を迫られる自由な道徳的主体であり、その選択に対して責任を問われる。聖書もこの点を非常に明確に述べている。

- F. つまり、ここ37節では、この方程式の両面が提示されているのだ。私たちの救い、すなわち永遠の行方に関する、表裏一体の関係である。

- 1. 父は、御自身のもとに来るすべての人をイエスに与える（神の主権、神の選民、神の選び）一方で、イエスのもとに来る者は決して追い出されることはない（人間の自由意志、自ら選ぶという人間の責任）。

- 2. 聖書はこれら両方のことを教えている。聖書がこれら両方の真理を明確に教えているからこそ、私たちはこれらの真理を把握できるのだが、私たちは有限な存在であるのに対し、神は無限であるため、常にこれらの真理を完全に理解できるわけではない。

3. 神の御業の中には、私たちの理解を超えるものもある。どうして両方が同時に真実となり得るのか？ それは私が心配したり、説明したり、調和させたりすべきことではない。
4. ヨハネによる福音書6章37節について説教していた際、著名な説教者チャールズ・スポルジョンは、神の主権と人間の責任をどのように調和させるのかと尋ねられたことがある。彼の答えはこうだった。「私は決して両者を調和させたりはしない。この二つは決して対立したことはなく、完全に一致しているのだ。違いがあると想像し、それを取り除こうとするのは愚かなことだ」。
5. そして、もし私たちがどちらか一方に偏れば、もう一方に固執するあまり、結局は片方を完全に排除してしまうことになるのだ。
6. 私たちはこの二つを調和させる必要はない。私たちの有限な知性ではそれらは対立しているように見えるが、神の無限の知性と御心においては、それらは完全な調和を保っているのだ。
- g. 38～40節で、イエスは父の御心について、また、父の御心を行うためにこの世に来られたことについて語っている。そしてこれらの節において、イエスは、神の主権と人間の自由意志が、私たちの生活における神の御心の一部であることを明らかにしている。
 1. 神が御子に与えたすべての者について（神の主権）、イエスが一人も失うことなく、最後の日に彼らをよみがえらせること、それが神の御心である。
 2. また、イエスを見て信じるすべての人（人間の責任）が、永遠の命を得て、最後の日によみがえることも、神の御心である。

3. まったく同じ結果を二つの表現で述べている。父がイエスに与える者たちは、決して失われることなく、最後の日に永遠の命へとよみがえらされることが保証されている。また、イエスを見て信じる者たちも、決して失われることなく、最後の日に永遠の命へとよみがえらされるのだ。
 4. 私たちの救いは確かなものだ。私たちが父によってイエスに与えられたからであり、かつ私たちがイエスを見て彼を信じたからである。イエスは、私たちが永遠の命へとよみがえるよう、必ず導いてくださるのだ。
- H. この二つが同時に真実である仕組みを理解する必要はないが、イエスが両方を明確に教えてくださったのだから、これらの真理を確かに受け止めることはできる。

X. 聖餐

- A. さて、ここで私たちは主の食卓に集い、聖餐式に与ることで、この礼拝を締めくくる。
- B. 礼拝チームと案内係が前に出てくる。案内係が皆に聖餐のパンとワインを配るのを手伝い、その間、礼拝チームが賛美の時間を導いてくれる。
- C. 今日、皆さんに伝えたいのは、聖餐の要素がキリストをどのように語り、指し示しているかを考えてほしいということだ。
 1. イエスは命のパンであり、天から下って来たまことのパンである。イエスが弟子たちと最後の晩餐を共にしたとき、パンを取り、それを裂いて、彼らにこう言われた。「これを受け取り、食べなさい。これはあなたがたのために裂かれるわたしの

体である。わたしの記念としてこれを行いなさい。」

2. 杯は、カルバリの十字架の上で、あなたと私のために注がれたイエスの血を表している。そこでは、イエスがご自身の血によって私たちの救いを買い取られたのだ。
 3. イエスは御自身の血によって新しい契約を立てられた。その契約によって、神の恵みが私たちの上に注がれるのだ。この契約は、誰であれイエスのもとに来て、イエスを信じ、それによって永遠の命を受けるよう招いている。
- D. これから、礼拝チームが礼拝の時間を導いてくれる。これからしばらくの間、イエスがあなたのために何をしてくださったかを思い起こしてほしい。
1. 主の砕かれた御体、流された御血を思い起こし、主が導かれるままに、聖餐に与ってほしい。私は普段のように再び前に出て聖書を朗読することはない。この時間を、主と共に過ごす時間としてほしい。
 2. 礼拝チームが歌を終えた時、まだ聖餐を受けていない人は、その時に遠慮なく受けてほしい。あなたが主と共に過ごす間、主があなたを祝福し、守り、その御顔をあなたに輝かせてくださいますように。